新刊紹介

『これがIT革命だ』

（竹内宏編，学生社）

日本電気硝子株式会社　研究開発部
長尾　向季

Senoir Manager, Research And Development Division

Hisatoshi Nagao
Nippon Electric Glass Co., Ltd.

2000年総選挙で二大与野党の党首がIT革命を訴えていた。目下，国政の重要な柱としてIT革命が取り上げられてきている。もはや子ギャルたちのお喋りに使う「ケータイ」遊びがITだと，バカにしているわけには行かなくなってきた。

IT関連の書物は多いが表題の本は，竹内宏氏の方針で，やさしい書き方に徹し，難しい言葉は使わないという趣旨がよく生かされいて，簡単に読めて概要を掴みやすく，入門書として適切な本である。IT革命によって日本の経済のしくみ，社会のありよう，生活スタイルが一変するであろうことが各担当の専門家によってわかりやすく説明されている。また本書では日本の特長を生かしたIT社会というものが説明されている。さらに政治・経済・社会・生活文化の全般にわたって，そのありようがこれまでとは大きく変わってしまい，それゆえ「ITは進歩でも革新でもなく革命である」ことの意味がわかりやすく強調されている。先進アメリカをモデルとして数量的なデータをもまじえてかなり詳しく将来が予測されているのは「革命」の類を見ない話で結構なことではある。

しかし本当に日本でそんな革命みたいなことが起こるだろうか。昔からの因習が色濃く残っているのが日本の社会ではないのか。「日本型社会や日本人の意識」は（ムラ社会）の中で培われてきた根の深いもので簡単に崩れるとは考えにくい。「滅私奉公」「お家大事」「親方日の丸」「帰属意識」「集団主義」などのルーツのいくつかは，古く中世の鎌倉武士団にさかのぼれる。それらの鎌倉以来の社会構造や意識は世界大戦によっても崩れず，むしろ「企業城下町」の繁栄や「官僚組織の再構築」など，戦後の日本において一層強化されてきたのではないのか。「お家崩壊時の死にざま」は視聴率を集めるテーマであろうが，繰り返しマスメディアに流されて意図的に再生産されているようにも思える。もっとも，最近ではその日本型社会がほころびてきていることも確かである。

IT革命はその日本の社会の変革を一気に加速しようとするものであると読み取れる。中世に始まった封建社会からの伝統を捨て去り，21世紀に向けて近代日本の構築を目指すのだと善意に解釈するならば，その革命のトンネル

〒520-8639　大津市晴嵐2-7-1
TEL 0775-37-8773
FAX 0775-37-2031
E-mail: hnagao@neg.co.jp

の出口が見えるかも知れず1市民として積極参加の意識も出てくるかも知れない。一方，悪く考えれば日本やヨーロッパのように歴史の長い伝統のある地域で，アメリカ・モデルをそのまま真似て良いとは思えない。そこで本書に紹介されているように，日本の特長を生かしたIT社会の構築ということになるのだろうが日本型IT社会とは結局は中途半端なものになりはしないか，日本のような「強固な組織社会」においてIT革命の本来の特長である（情報の開示など）が変質していかないか，ITを駆使する経済活動が，ごみを大量に生み出す大衆消費社会の姿を変えたものに過ぎないのではないか，モノ作りの現場でITが本質的な部分で寄与できるのか，などの幾つかの懸念が残る。

歴史の大きな流れで見れば，「職業選択の自由」が明治に出現し，さらにこれからは「転職の自由」が拡大し，すなわち働く人々の「自由度」が拡大していくのが必然なのだろう。経済活動が地球規模に拡大し世界が「大競争」に巻き込まれていく中で，流れを妨げる「規制を撤廃していく」ことが避けられないのかも知れない。本書ではIT革命のマイナス部分（中間層の没落など）も説明されている。老若男女を問わず多くの（ケータイも持たない私のような）人間には，当面ITテクニックの習熟に時間を取られるだろうし，トンネルの先に何があるのか想いを巡らす余裕はないだろう。それだけに本書はこれからの社会を照らしてくれる格好の案内書である。